

図 4-19 クマタカ生息情報と生息適地の重ね合わせ

4.3.3 オオタカ

(1) 文献及び現地調査結果による現状把握

文献及び現地調査の結果、全県 380 メッシュ中、生息確認の情報があつたものは 168 メッシュであつた（図 4-20(1)）。このうち、繁殖情報（繁殖の可能性ありを含む）があつたものは 48 メッシュであつた。確認場所は北上山地、太平洋沿岸部から内陸部の平地や丘陵地、奥羽山脈の高標高地を除く山地等であつた。

営巣地の情報は 98 地点（同一ペアのものを含む）あつた（図 4-20(2)）。主に北上山地や太平洋沿岸部、平野から丘陵地にかけて確認されており、都市部のパッチ状に残存する緑地帯でも繁殖が確認されている。

前回調査と比較すると、前回調査及び今回調査のいずれも情報があつたものは 96 メッシュ、今回調査のみ情報があつたものは 72 メッシュ、前回調査のみ情報があつたものは 48 メッシュであつた（図 4-20(3)）。今回調査で新たに確認された場所は、北上山地北部や東松島市周辺の丘陵地、鳴子ダムから二ツ石ダム周辺にかけての山地、白石市周辺等であり、前回調査で確認された荒雄岳周辺の山地や鳴瀬川中流域周辺、七ヶ宿町周辺では生息情報がなかつた。今回調査で新たに確認された理由として、全国と同様に県内のオオタカの生息個体数が増加している可能性があるほか、震災復興関連や土地区画整理事業、ソーラー発電事業等の環境調査の実施に伴う情報量の増加が考えられる。一方、今回調査では確認されなかつた場所については、環境調査が実施されていない場所に該当していたり、山地のため生息確認が困難である等の理由が考えられる。また、前回調査において確認されたオオタカ営巣地のうち、表 4-11 で示す 4 地点の営巣地について、繁殖状況の再確認を行った。その結果、いずれの営巣地も前回調査時に確認された巣の再確認には至らず、周辺部を含めて新規の巣も確認されなかつた。しかし、営巣地周辺の環境は、現在もすべての営巣地でオオタカの生息環境となりうる状況であつたことから（図 4-20(4)）、これらの生息地のペアは近隣の生息環境に移動したものと考えられる。

生息情報について東日本大震災前後を比較した結果を図 4-20(5)に示す。全体的な分布には大きな変化は見られないものの、震災後では仙台湾沿岸部や仙台市の平野部周辺における繁殖情報が増加している。これは、震災復興関連や土地区画整理事業、ソーラー発電事業等の環境調査の実施に伴う情報量の増加によるものと考えられる。

このように、県内のオオタカは、高標高地を除く県内全域において広く生息が確認されており、営巣地も海岸部から山地にかけて広く存在している。このうち、仙台湾沿岸部の海岸林で繁殖するオオタカについては、震災に伴う津波により海岸林の高木の大部分が消失し、繁殖適地が減少していること、海岸林周辺での復旧・復興事業の影響等により繁殖成功率も次第に低下しているとの情報がある（表 4-12）。また、今後の震災復興に伴う改変により海岸林の伐採等も考えられることから、これらの生息地については保全上留意することが望ましいと考えられる。

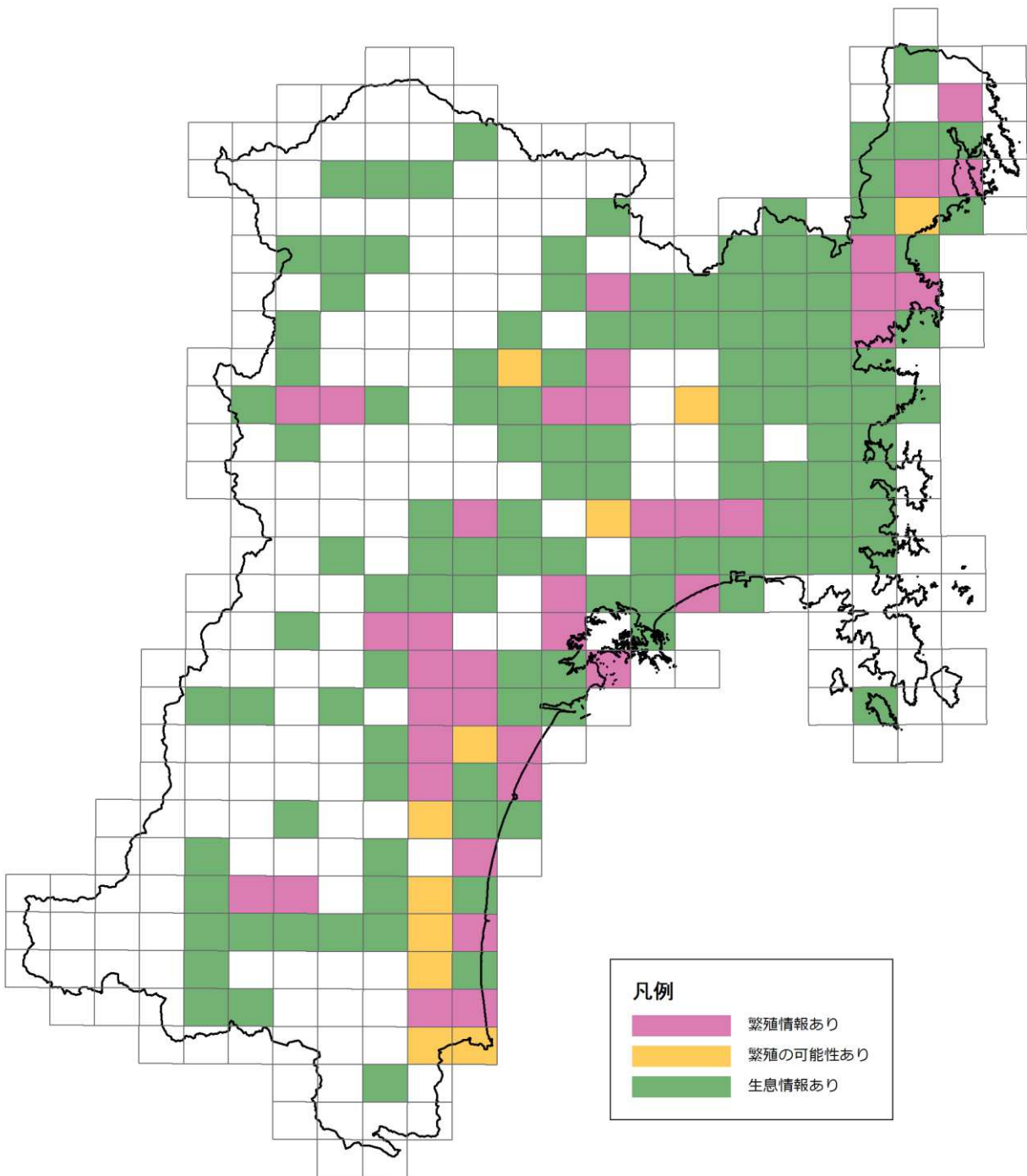


図 4-20 (1) オオタカ：生息情報地域（文献調査結果及び現地調査結果）

種の保護の観点から非公表

図 4-20(2) オオタカ：営巣地情報の位置（文献調査結果及び現地調査結果）

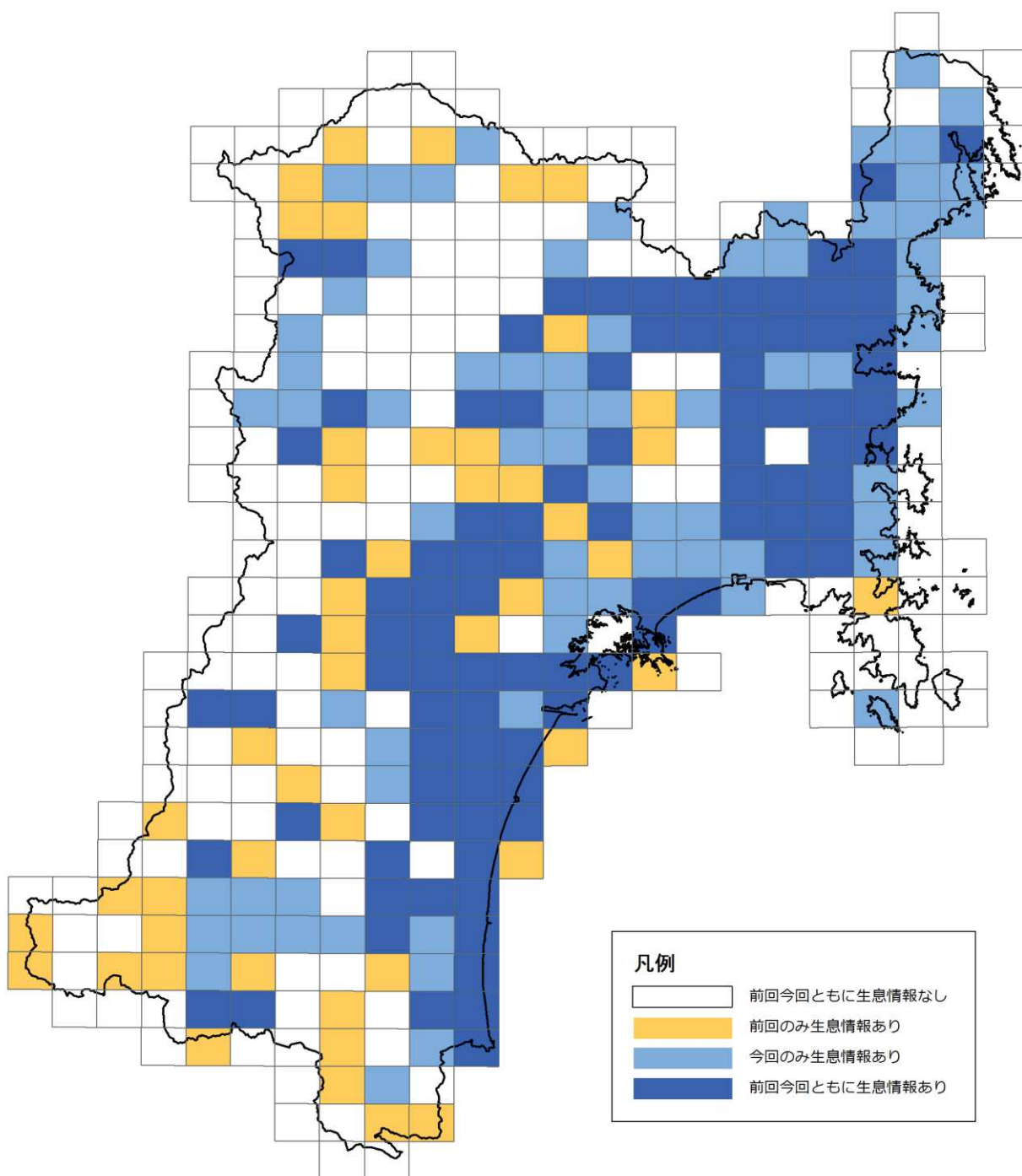


図 4-20(3) オオタカ：生息情報地域（前回調査結果との比較）

表 4-11 前回調査時に確認されたオオタカ営巣地の再確認結果

確認地点	結果
A	確認できず
B	確認できず
C	確認できず
D	確認できず



図 4-20(4) 過年度結果のオオタカ営巣地の状況（地点 D の例）

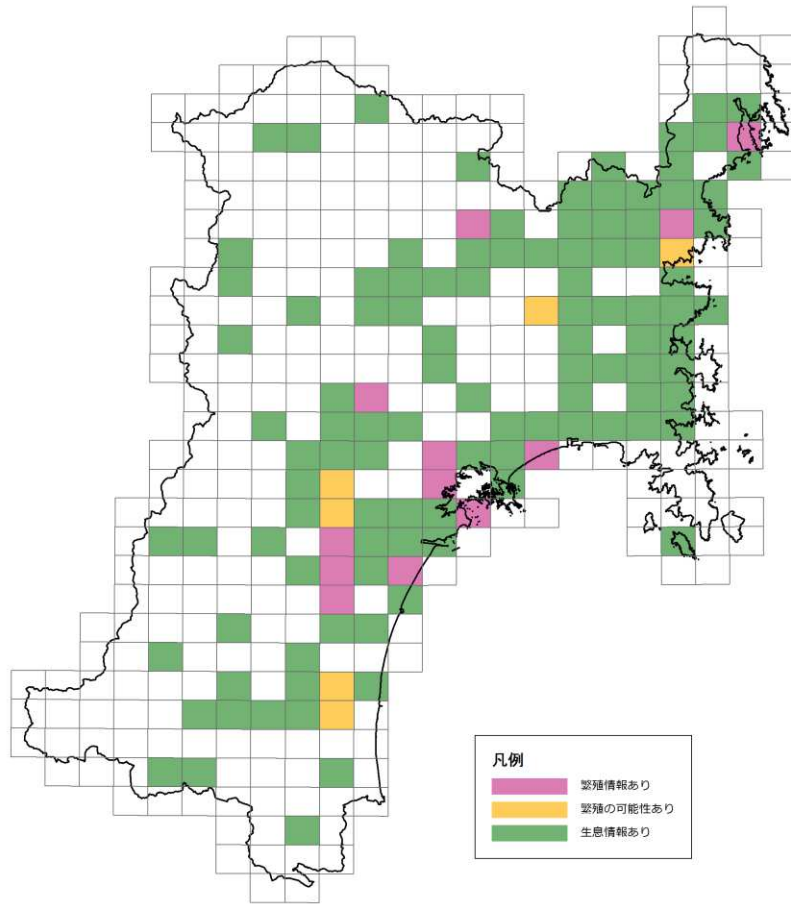
表 4-12 海岸林に生息するオオタカの繁殖状況

ペア名	平成 21 (2009)年	平成 22 (2010)年	平成 23 (2011)年	平成 24 (2012)年	平成 25 (2013)年	平成 26 (2014)年	平成 27 (2015)年
E	—	—	—	○	○	○	×
F	—	△?	—	◎	◎	○	○
G	—	—	—	◎	×	×	×
H	—	—	—	◎	◎	◎	○
I	—	—	—	◎	◎	◎	×

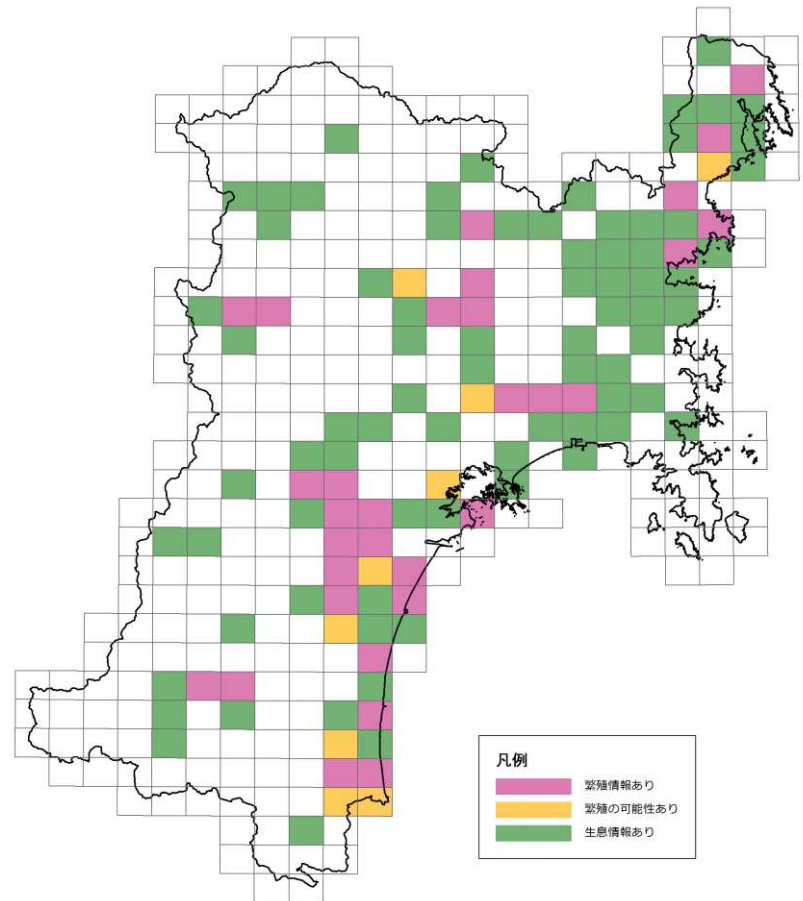
※有識者からの情報に基づき作成。

※表中の凡例は以下に示すとおりである。

◎：繁殖、○：途中で失敗 △：繁殖の兆候あったが抱卵せず ×：繁殖せず、
落：落巢 —：情報なし ?：不確かな情報



震災前（平成 22（2010）年以前）



震災後（平成 23（2011）年以降）

図 4-20(5) オオタカ：東日本大震災前後における生息情報地域の比較

(2) 詳細な生息環境分析

(ア) 生息適地の抽出

県内全域の生息適地を抽出した結果を図 4-21 に、文献調査及び現地調査で得られた生息情報及び営巣地情報と生息適地を重ね合わせた結果を図 4-22 に示す。

生息適地として抽出された主な場所は、県内全域の丘陵地のほか、北上山地や奥羽山脈のうち、比較的傾斜の緩やかな場所等であった。

また、文献調査及び現地調査で得られた生息情報と抽出された生息適地を比較すると、生息情報があったメッシュと生息適地が抽出された場所は、大部分で重なっていた。しかし、大崎市や栗原市周辺の丘陵地、角田市、丸森町周辺等では、生息適地は抽出されているが、実際の生息情報は得られていないメッシュがあった。

なお、文献調査及び現地調査により確認された営巣地情報と抽出された生息適地を重ねた結果、営巣地 98 地点のうち、87 地点は生息適地と重なっており、生息適地としては妥当であると考えられる。

(イ) 震災による生息適地への影響

震災以前よりオオタカの生息地となっており、津波の影響を最も受けている仙台湾沿岸域の生息適地の変化の様子を図 4-23 に、仙台湾南部の海岸林にある営巣地周辺の震災前後での環境変化の例を図 4-24 に示す。また、県内における沿岸域全体の震災前後での生息適地の面積変化を図 4-25 に示す。

沿岸域全体の生息適地の面積は、震災以前は 1,708ha あったが、平成 26 (2014) 年には 163ha となっており、1,545ha の大幅な減少 (震災以前比 -90%) となっていた。その大部分は、仙台湾沿岸域の石巻市から山元町にかけての生息適地の減少であり、その原因は、津波によるクロマツ植林等の海岸林の高木の消失であった (図 4-23)。また、文献調査で得られた営巣地情報と抽出した生息適地を重ね合わせると、震災以前は仙台湾沿岸域に生息している 5 ペアのすべてが生息適地と重なっていたが、震災後は 1 ペアのみが生息適地と重なる状況に変化していた。

仙台湾南部において、わずかに残ったクロマツ植林の営巣地の様子を見ると、震災以前は、まとまったクロマツ植林であったが、震災後は、多くのクロマツ林は枯死し、営巣地周辺は疎林となっていた (図 4-24)。また、震災以前は採食環境であったと考えられる営巣地周辺の水田や畑地が、震災後は放置されており雑草地となっている状況であった。

(ウ) 分析結果の考察

オオタカの生息適地は県内全域に分布しており、文献調査及び現地調査の生息情報においても、おおむね同様の結果となっていた。しかし、文献調査及び現地調査は県内すべての地域を網羅していないことから、一部の地域の生息情報については未確認であり、さらなる情報収集が必要であると考えられる。

震災による影響の分析では、オオタカの生息適地への影響は大きく、特に仙台湾沿岸域の生息適地は大幅に減少していた。一部の地域では、津波の被害を免れた海岸林において繁殖が確認されているが、本分析の結果では、それらのほとんどは震災後の環境変化により生息適地ではなくなっていた。また、海岸林の高木が大規模に消失したことで開放地が増え、ノスリにとって好適採食地が増えた可能性がある。その結果、ノスリの生息数が増え、営巢環境が競合するオオタカとの間で営巢地獲得競争が生じ、オオタカの繁殖状況に変化が生じることも考えられる。これらのことから、沿岸域に生息するオオタカについては、今後の生息状況を注視していくことが重要である。

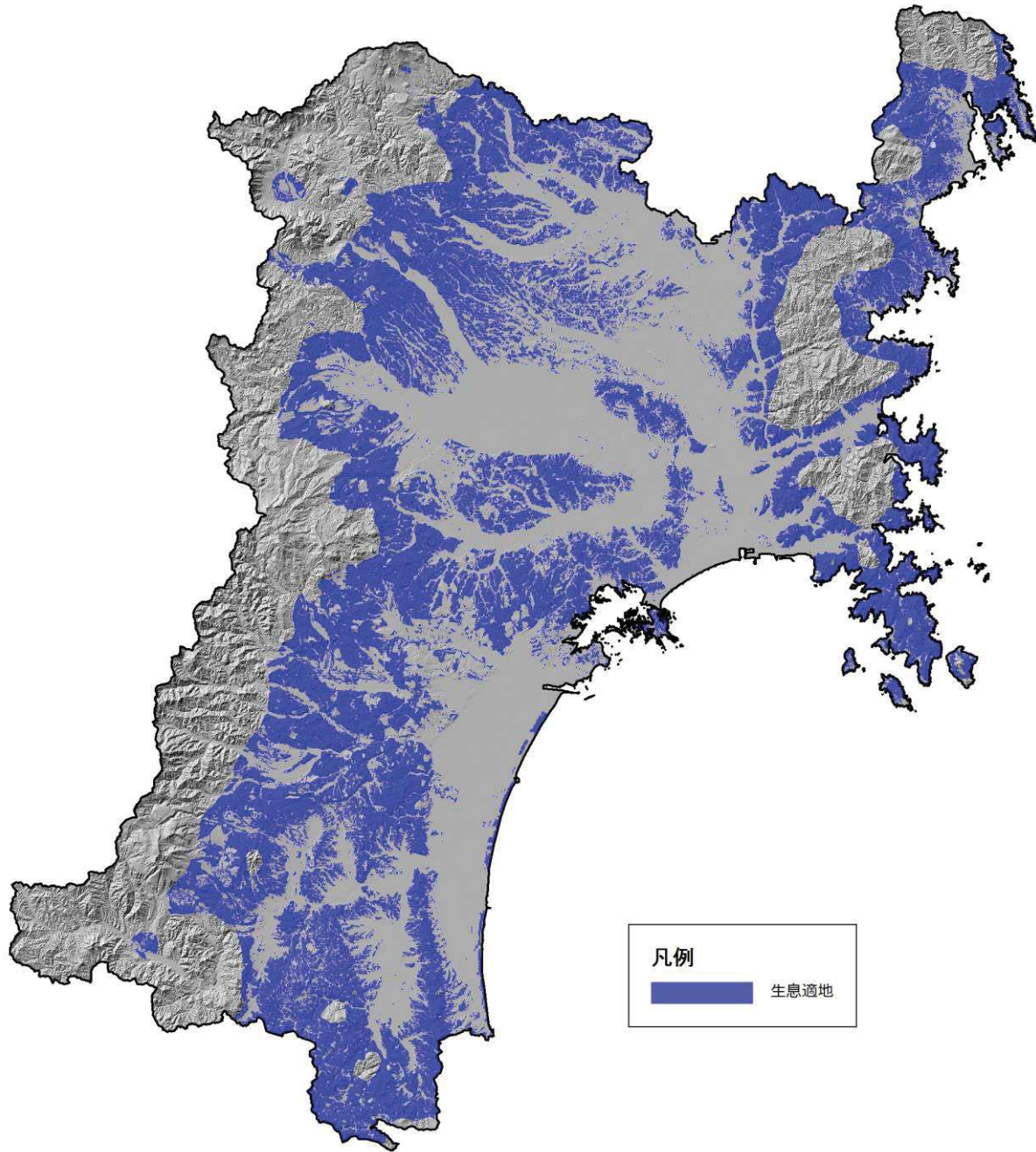
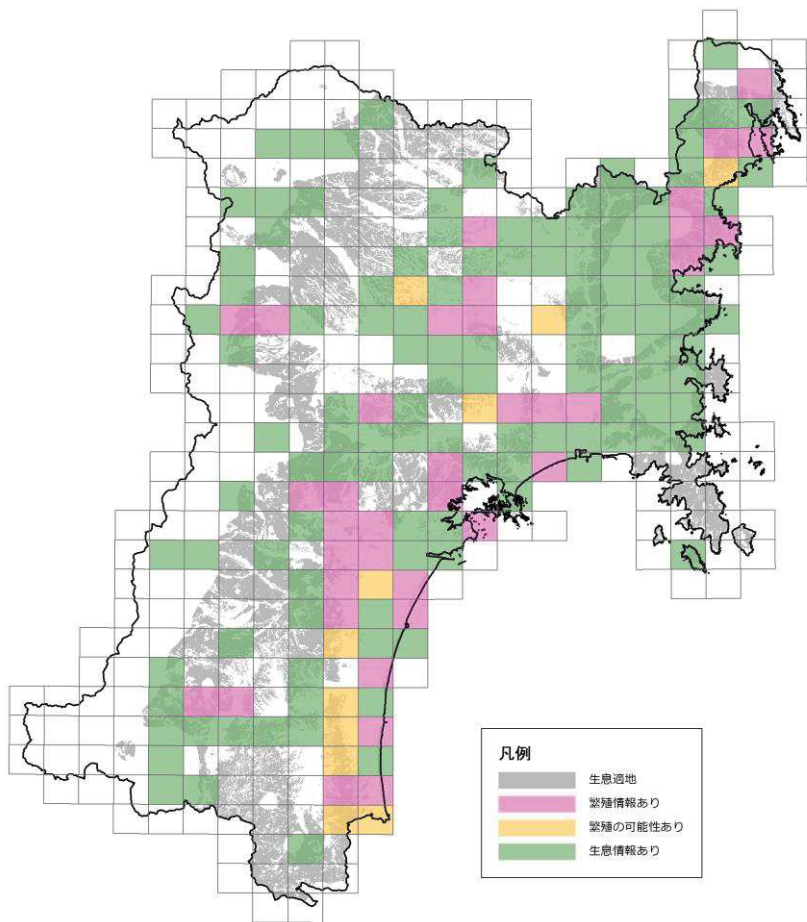


図 4-21 オオタカの生息適地



種の保護の観点から非公表

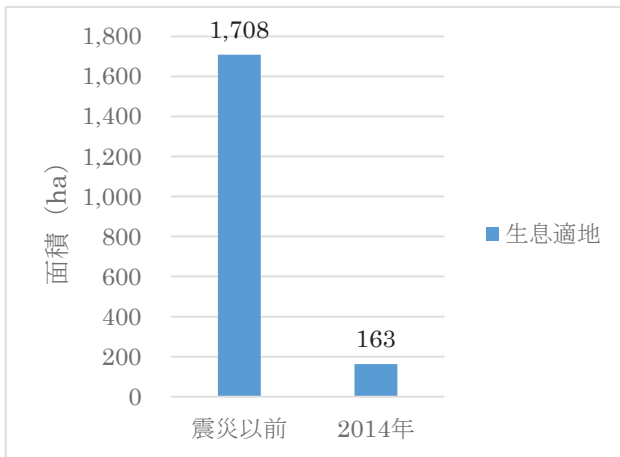
図 4-22 文献調査及び現地調査と生息適地の重ね合わせ（左：生息情報、右：営巣地情報）



図 4-23 震災前後のオオタカ生息適地の変化（左：震災前、右：震災後）

種の保護の観点から非公表

印刷しない



生息適地面積 (ha)		減少面積 (ha)
震災以前	平成 26 (2014)年	
1,708	163	1,545 (90%)

図 4-25 沿岸域における震災前後の生息適地の面積変化